聖書神学舎通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.202
2025.12.1

巻頭言
Greeting

× 早坂　恭
Takashi Hayasaka
聖書神学舎 評議員
東村山福音自由教会 牧師

Profile

1975 年生まれ。中央大学法学部を卒業後、3 年の社会人生活を経て聖書神学舎に学ぶ。卒業後、2003 年より東村山福音自由教会の牧師となり現在に至る。2013 年から 2016 年まで聖書神学舎の新約学講師を務め、2024 年より聖書神学舎評議員となる。

みことばに生きる

「ここは全人格的な学び舎です」と、当時の会長だった舟喜信先生が言われたことが今でも残っています。神学舎での学びの内容は非常に難しく、受験生の頃よりもはるかに勉強した記憶があります。生まれたばかりの長女を寝かしつけながら、ギリシャ語を暗記する日々。毎授業のクイズでなんとか及第点をと過ごしていましたので、頭に詰め込む作業が続きました。母教会での奉仕ということもあり、教会での奉仕も容赦なく与えていただきました。隣で見ていた妻は「この人、勉強と奉仕のしすぎで死ぬのでは?」と思ったと言います。当然ながら、そのような無理は継続できるものではありません。二年生に上がってしばらくして、学びに対する意欲が落ちてしまった時期がありました。何のためにこの学びをしているのかと問われました。原語に遡って苦労して調べて、果たして人々を生かす説教ができるのだろうか。英語の資料はもとより、日本語の専門書でさえ、「なぜ、こんなに難しく書かれているのか」と疑問を抱きました。

しかし、思い返せばいつもそうなのですが、挫折やつまずきのたびに私を立ち返らせてくれるのは、やはり主のみことばでした。第二テモテ 2 章 15 節は、学びの召しをいただいたみことばですが、「あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい」と語られています。「務めにふさわしいと認められる」は、『聖書　新改訳』第三版では「熟練した者」と訳されていました。訓練され、練り上げられる過程が意識されていると感じます。働き人はみことばと向き合って格闘し、練り上げられる必要があるのです。そこには「自分を神に献げるように最善を尽くしなさい」ともあります。それは寝る間も惜しんで勉強し、倒れるほど忙しくすることではありません。「滅私奉公」で自分を滅ぼすのではないでしょう。むしろ、自分の心と生活全体を主に献げることによって、私たちは生きる、いや、生かされるのです。それこそが主の望まれる最善であると思うのです。働きには聖書の知識が必要不可欠であり、釈義の技術が必要です。しかし、それらを生かす人格もまた、みことばによって練り上げられる必要があります。そして、もちろん、この学び舎での営みも、主のみことばによって善悪の判断がなされ、行われていくことが大切でしょう。

聖書神学舎の学びはやはり大変だと思います。しかし、本気でみことばと格闘させていただける場であり、みことばによって生きることを学ぶことのできる「全人格的な学び舎」であると、私は今も思っています。みことばのために生きて行こうと献身した者ですが、今は、みことばによって生かされ、働きを続けさせていただいていることを、心から喜んでいます。主の恵みとあわれみに感謝しつつ。

No.202 Topics

- p03　秋の行事から：リトリート、オープンデイ
- p04-05　証し：研修生、教会奉仕、奉仕教会の声
- p06　学びの窓
- p07　聖書学研究所から

強くあれ。雄々しくあれ。

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書神学舎 校長

ただ強くあれ。雄々しくあれ。... 律法のすべてを守り行うためである。これを離れて、右にも左にもそれてはならない。あなたが行くところどこででも、あなたが栄えるためである。このみおしえの書をあなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさめ。そのうちに記されていることすべてを守り行うためである。

（ヨシュア記 1:7,8 より）

「強くあれ。雄々しくあれ」のみことばは、私たちを力づけ、励まします。申命記の終わりとヨシュア記の初めに繰り返されるこれらの勧めには、みことばへの聴従という指針が添えられています。どの時代の神の民にとっても大切な指針を、感謝して心に刻みましょう。

折り返して

前期最終日（10/21）に早速、3 名のチームが能登に向けて出発しました。被災地に想いを寄せ続けたいと思います。10/25 はオルガン協力会による演奏会。このために研修生有志で地域にもチラシをポスティングして祈りが積まれました。楽しみにしていた神学校親善ソフトボール大会（10/27 の予定）はグラウンドコンディションにより中止に。リトリートと 11 月のオープンデイの様子は別頁をご覧ください。

慌ただしくも幸いな折り返し地点を越えて、学舎の後期の働きが始まっています。祈りの日（11/19）に津嶋理道師、賛美礼拝（11/29）では鞭木師がみことばの奉仕をしてくださいました。

卒業予定者 4 名にとっては最終学期です。最後まで主の懇ろなお取り扱いを受けて、練り整えられる期間となることを祈っています。

展望して

新年度要覧が発行され、10 月から願書の受付が始まっています。学舎に主の召しの器たちが 大勢加えられることを期待しています。

聖書神学舎ばかりでなく各地の同労の神学校にも献身者があふれるよう、教会の祈りを合わせていただきたいと思います。せっかく開かれ整えられているのに、在校生がいないという現場もあります。「福音主義神学校協議会」という約 25 校の交わりがあり、先日、会長を引き受けることになりました。聖書の福音に堅く立って、互いのために祈り、協力する交わりのため仕えます。日本と世界の宣教の前進のために、大勢の献身者が起こされるように祈りましょう。

聖書神学舎の拡大教育としては、教会音楽講座の後期が始まりました。継続教育のオンライン講座も諸師に活用していただきたいです。

感謝と祈りの課題

かねてからお祈りいただいていた専任教師の必要について、主の備えが明らかにされ、新年度から田村将師を専任でお迎えする道が開かれました。主に感謝し御名をあがめています。理解と祈りをもって送り出してくださる教会と教団にも感謝します。一方、職員人事の必要についてはなお祈りが続きます。

今後の学舎運営がどのような形をなしていくのか、一同で祈り求め、協議しています。この点でも、どうぞお祈りください。また、経済の必要のためにもよろしくお願いします。

私たちも、学舎で諸教会、諸団体、諸師のためにお祈りしています。皆様に恵みの主の祝福がありますように。

「貧しい」とは、「豊かである」とは。

Retreat リトリート

嘉数 泉
Izumi Kasw
聖書神学舎 本科3年

今年のリトリートは「教会と貧困」をテーマに、学びを中心とした修養会となりました。講師として日本長老教会千住キリスト教会の金小益（きん そんいく）先生、また現牧師夫人 堆朱光良（ついしゅ みつよし）姉をお迎えしました。

千住キリスト教会のミニストリーのひとつに、荒川河川敷での給食伝道があります。毎週水曜日に、様々な背景を持った兄姉が河原に集められ、雨の日も雪の日も、30年近くそこで礼拝がささげられています。どのようにして思いが起こされ、働きが導かれていったのか。金先生の救いと献身のお証しを交えながら、「貧しさ」とは何か「豊かさ」とは何かという根本的なところの深い示唆を頂きました。

親切なサマリア人のたとえで、どこかであのサマリヤ人の側、“親切にする側”に、自分を投影していないかと問われ、理解が貧しくなっていたことに気づかされました。「青空礼拝」と呼ばれる河川敷での礼拝について、堆朱姉が「千住教会からもうひとつの教会が生まれた思いだ」と仰いました。経済的に“豊か”でなくとも、キリストにあって“豊か”。その逆も、あるいは。

「善きサマリア人とはイエス様のことです」——しかしそのイエス様はどこにいるか、炊き出しの列に並んでおられるのではないか。イエス様は神であられるのに、私たちのために小さくなられました。私たちも、貧しくなられたイエス様の“豊か”な歩みの中に招かれている、と教えられたリトリートでありました。

主が働いてくださる

Open Day オープンデイ

本間 里辺香
Ribeka Honma
聖書神学舎 本科3年

オープンデイは、研修生にとっては普段の授業の１回分であり、外部から来られる方にとっては神学舎のことを知って頂く機会、学びの機会となります。私にとっては日常と非日常が交錯する、新鮮な日でもあります。

皆さんと一緒に授業を受けられたこと、交わりの時を持てたことが感謝でした。授業を通して、先生方が楽しそうに教えて下さる姿に毎回感動し、色褪せないみことばであるということを再認識させられます。また、オープンデイのために朝早くから皆さん来られていて、聖書のことや神様のことを知りたい、学びたいと思っておられる方がたくさんいる事を嬉しく思いました。

オープンデイを通して改めて献身とは何かについて考えていました。ある日突然神様からの招きがあって従う人もいるかもしれません。しかし、このような日の延長線上にも献身があるのかもしれない、とも思わされました。神学校の日常に触れ、神学生や先生たちとの交わりを通して、主が働きかけて下さることもあることでしょう。

献身者不足と言われている昨今ですが、神学校の日常をお届けすることでより親しみを感じて頂き、神様に御心を求め考える一つの機会となってくれたら幸いだなあ、と思います。また、私たちも、収穫の主に働き手を送って下さるように祈る必要があります。

新しい気づきを頂けたこととオープンデイの一日を、主に感謝して。

神様の豊かさに驚かされる日々

後藤 優香
Yuka Goto
聖書神学舎 聖書科・聖書専攻2年

聖書神学舎に入学して以来、これまで自分一人では知ることができなかった神様の豊かさに、日々驚かされています。

その恵みを特に感じるのは、女子寮での交わりの中です。単身寮では、毎日「早天祈祷会」と「同室者祈祷会」を行っています。入学当初は、「毎日2回も何を祈ればよいのだろう」と不安に思っていましたが、その不安はすぐに取り除かれました。祈祷会や分かち合いを通して、自分一人では気づくことのできなかった神様のみわざに気づかされ、深められていったのです。

神様と自分との関係、共に祈ってきたことへの神様の応答、それらを分かち合い祈る中で、一人で祈るときよりも視野が広げられていくことを実感しています。また、神学舎には年齢も背景も異なる方々が集まっています。女子寮で何かが起こったときに、それぞれの「愛の形」の違いに向き合うことの難しさもあります。しかし、その中で逃げずに、祈りつつ他者と誠実に向き合っていくことで、神様の愛の理解が深められていくことを感じています。

また、学びの面でも神様の豊かさを実感しています。組織神学やキリスト教史、通論などを通して、「神とはどういうお方として理解され、どのように語られてきたのか」を学ぶ中で、これまで漠然と抱いていた神のイメージが、言葉をもって整理され、理解が深められています。

さらに、神学舎では原語から聖書を学ぶことができるのも大きな恵みです。正直なところ、私は言語が得意ではなく、「日本語に訳されているのに、なぜ原語で学ぶ必要があるのだろう」と入学当初は疑問を抱いていました。しかし祈りつつ学ぶ中で、少しずつその意味を教えられています。今もなお原語で十分に読めるとは言えませんが、神様が人にみこころを伝えるために用いられた言葉を学び、その言葉が当時どのように受け止められていたのかを探ることができる――それ自体が大きな恵みであると感じています。

この神学舎での日々は、学びを通してだけでなく、生活そのものを通しても主を知ることができる日々です。主がどのようなお方であるのか、その理解が、少しずつ、しかし確かに深められています。

このように神様は、罪深くみことばを聴くことにおいて未熟な者をも愛し、召してくださるお方です。そして、さまざまなかたちでご自身を教え、現してくださるお方です。このあわれみ豊かな神様に、心から感謝と賛美をおささげいたします。

（写真：女子寮の研修生たちと中庭で。筆者は後列左から2番目）

牧師室での祈り

北﨑 慎也
Shinya Kitazaki
聖書神学舎 本科3年

皆さまとの交わり・お祈りに支えられ、ここまで歩めていることに感謝いたします。

昨年度・今年度は石神井福音教会にお仕えしています。まず土曜日は、午前の講義が終わり次第、教会に向かい、翌日の礼拝の準備やトラクト配布をします。日曜日は朝の教会学校から始まり、夕拝まで神様にささげることを心がけています。

ここまで、1年 7 ケ月に渡る土日の石神井福音教会での奉仕を振り返ったときに思い返されることの一つに「牧師室での祈り」があります。土曜は1回、日曜は朝と夕方の2回。必ず、畑中牧師と牧師室での祈りの時があります。実は昨年の秋ころ、私は自分の現状や将来に不安を覚え、恐怖に苛まれている時期がありました。そのような時期の、ある日の祈りの後で、畑中牧師に励ましていただいたことが今でも忘れられません。「私は神さまに愛されている」。その原点に立てば、何も恐れるものはない・・・と。

恐らくこの時期から私はお祈りをするとき、「愛する天のお父さま・・・」と祈り始めるようになったと思います。今となっては、それまで、自分がどのように祈り始めていたか、思い出せませんが、ひとつの苦しみを経て、神さまの愛に立ち返った時に、「愛する天のお父さま・・・」と、以前よりも、愛と親しみを持って祈るように変えられたのです。

「愛する天のお父さま・・・」と日々祈り、残りの研修生生活に励んで参ります。

（写真：石神井福音教会の外観 /2025 年 8 月の韓国ミッショントリップにて）

この時代に働き人を送り出す

畑中 洋人
Hiroto Hatanaka
日本同盟基督教団 石神井福音教会 牧師

私たちの教会では、奉仕神学生には土曜日の礼拝準備、日曜日の礼拝司会、礼拝説教、ＣＳ教師、イベント準備、ちらし配布、雑務（これが一番多い）と多岐に渡る奉仕を担ってもらっています。信徒たちは、身近に献身者との交わりが与えられることによって、励まされたり、教えられたり、信仰者としての自らの歩みを見直すきっかけとなったりと、多くの恵みと刺激を受けています。求道者にとっても神学生は牧師の私よりも気軽に話ができるようです。1～2 年間の期間限定ではありますが、教会の方々は奉仕神学生が与えられていることを主からの恵みとして大変喜んでいます。

しかし牧師としては、神学生を迎えることは楽しみである一方、大きな責任も感じています。特に昨今の教会をとりまく環境は非常に厳しく、やがてその現場に送り出すことを考えると、研修は楽しいだけではいけないと思わされています。私が牧会を始めた頃よりも、宣教も牧会も努力がなかなか報われない時代となり、人間関係も繊細です。心が折れない信仰による忍耐力に加え、説教力、コミュニケーション力などの向上を祈らされます。また主はみことばの約束を必ず成就されること、宣教は喜びであることを神学生の間に身をもって体験してもらいたいとも願っています。奉仕教会ができることには限りがありますが、少しでもお役に立てれば幸いです。

File No.033

「夕方になり日が沈むと」(マルコ 1:32)

三浦 譲
Yuzuru Miura
聖書神学舎 教師

共観福音書の中でマルコの福音書が一番短いのは周知のことです。例えば、四十日間イエスが荒野でサタンの試みを受けた記事(マルコ 1:12-13)は、マタイとルカの福音書とは違ってその詳細は語られません。そして、いつもそう訳されているわけではありませんが、「すると、すぐに」(ギリシア語で「カイ エウスュス」)という表現がマルコの福音書では実に 25 回も(例えば、1:10、12、18、20、21、23、29、30、42 …。マタイの福音書、ルカの福音書ではそれぞれ 1 回ずつのみ登場)繰り返されながら、出来事がテンポよく語られていきます。

そのようにマルコの語りの歯切れ良さがある一方、たとえば 1 章 32 節にくると「夕方になり日が沈むと」と言われ、その表現に冗長性(redundancy)が見られます。この箇所では、安息日が明けた途端、人々が多くの病人や悪霊につかれた人たちをイエスのもとに連れてきます。他の福音書における並行記事ではこうです。マタイの福音書では「夕方になると」(8:16)のみ、ルカの福音書では「日が沈むと」(4:40)のみです。しかしマルコの福音書では、「夕方になり」と「日が沈む」がその意味において重なり合っているわけです。すると学者たちはすぐに「マタイとルカがマルコの表現を改善(improve)した」と言います。マタイやルカに比べ、マルコのこの表現は確かに冗長的(redundant)です。新約の学者たちは、冗長性(redundancy)を何かすっきりとしていない、優れていないものであるかのように扱う傾向があります。けれども、マルコの「夕方になり日が沈むと」という表現は改善されないといけない表現なのでしょうか。

おもしろいことに、マルコの福音書は共観福音書の中で全体的には一番短いのに、一つのエピソードは他の福音書に比べて長いということがあります。たとえば、富める青年に対して神の国に入ることの難しさが語られる箇所では、マタイの福音書 (19:23-30) では 154 の語が用いられ、ルカの福音書 (18:24-30) では 110 の語が用いられますが、マルコの福音書 (10:23-31) ではなんと 171 もの語が用いられます。「マルコの福音書がマタイとルカの福音書の省略版だ」という意見も現実味を帯びていません。しかもこの並行箇所で、マタイとルカの福音書には見られないことですが、マルコの福音書では「…神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう」(マルコ 10:23-24) と「… 家、兄弟、姉妹、母、(父、)子ども、畑」(マルコ 10:29-30) がそれぞれ二回繰り返され、またも冗長的な(redundant)表現となっています。

この、マルコの福音書が持つ「語りのテンポの良さ」と、時に登場する「冗長性」(redundancy)は相容れないものなのでしょうか。いいえ、両方とも、マルコが福音を「生き生き」と語っているということに寄与しているのだと思われます。マルコが全体として福音をテンポ良く語りながらも、時に立ち止まってその情景が読者の頭に思い浮かぶようにと詳しく語り、いずれもマルコの福音書の語りが持つ「生き生きさ」を際立たせています。新約釈義のクラスでは、学生たちと、「まずは私たちが原文に触れながら、マルコの福音書が持っているこの語りの特徴を知り、その『生き生きさ』というものを教会の場で分かち合っていくことができればいいね」と話していることです。

新しい風？

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書学研究所 所長

聖書学が直面する課題は、今も昔も変わっていないようです。聖書にどこまでも「聴き続ける」のか。途中で、聴くことをやめて、自分の考えや人の意見をそこに「読み込む」ことで満足するのか。それとも、いつか分かるようになることを願って、判断を留保しておくのか。

最近、聖書は私たち現代人に向けて書かれたのではなく、古代人に向けて語られたのであるから、古代人の認知環境において聖書を読まなければならないという主張がなされています。確かに、それは原則としては正しいのですが、現代の学者・読者のうち、どれ程の人が、聖書の世界の「認知環境」を十分に理解しているのでしょうか。古代の歴史や文化は、学べば学ぶほど、自分がいかに少ししか知っていなかったかを知ることになります。こと宗教については、現代の聖書学は、ヘーゲルの歴史哲学に根ざした、「宗教は原始的なものから、高度なものに一直線的に発展・進化する」という、19 世紀の宗教史の考え方にいまだに支配されていて、本当のことがまだ分かっていないのかもしれません。

さて、前回紹介しました、伊藤暢人氏の修士論文『ヘブル詩の並行法における動詞 yiqtol 形と qatal 形の関係ー詩篇第 1 巻における用例研究ー』(2024)は、詩篇の並行法に見られる動詞の文法的、語彙的、意味的な研究ですが、翻訳や釈義において直面するヘブル語と日本語の関係や、詩篇のより正確な理解のために避けて通ることの出来ない重要な課題に、果敢にかつ緻密に取り組んでいます(ホームページ参照)。

会員の星野仁子氏は、マラキ書に関する研究の一部を、今夏、ウプサラでの国際聖書学会(SBL)で発表し、参加した学者たちから良き刺激を得てきました。来年度末の論文の完成を目指して励んでいます。10 月には、昨年に続き、中国の大学で教鞭をとっておられる大嶋隆義先生(ライプツィヒ大学)が来羽し、ハムラビ『法典』の講義と田村将準会員の指導をしてくださいました。

所員の三浦先生は、数年前から新改訳聖書の新約聖書翻訳委員としての働きが加わっていますが、多忙な中、引き続き児玉剛先生(11 月 4 日、召天。本号 8 ページ「近況と祈りの課題」を参照)とともに「N. T. ライトの神学を問う」のプロジェクトを導いています。それと同時に、新約聖書ギリシア語の文体的特徴についての研究や、新約における旧約使用研究も継続しています。

津村は、夏にドイツのゲッティンゲン大学とベルリン大学で、ウガリト語「エル」の複数形が集合的な「神」を指す場合について、またカナンの多神教の「神さま」概念と旧約聖書の神概念の違いについて研究発表をしました。欧米の学者たちが私のこれらの発表に興味を抱き、『一神教と多神教』の論文集に貢献するようにと依頼してきました。八百万の神を「神さま」として「ひとくくり」に信じている国で、唯一の「まことの神」を信じる者とされていることの幸いと責任を感じています。

今後とも、研究所のためにお祈りくださいますようにお願いいたします。

聖書神学舎通信 No.202 発行者：小林 久実 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

教師・講師の証し

「それでいいのか」という問いとともに

児玉 剛
Takeshi Kodama
聖書神学舎 講師

米国で大学生活を送っていた時のことです。ある日、私は不法滞在者となっていた日本人ホームレスに出会いました。私がキリスト者だと知った彼は、「イエス・キリストのことを教えて欲しい」と願いました。私は喜んで福音を伝え始めましたが、あっという間に時は経ち、気付けば夜の9時半を過ぎていました。

私の大学はキリスト教系大学で、未成年者は夜10時までに寮に戻るという規則があり、門限破りには退学処分もありえました。「もう少しだけ教えて欲しい」と懇願する彼に私は告げました。「また、明日にします。」未信者である親に留学費用を出してもらっていた私は「門限破りで退学処分になったら親に申し訳ない」と考えたのです。

翌日、もう彼はいませんでした。聞けば、朝早く、テキサス行きの長距離バスに乗ったというのです。「あぁ、俺は未信者の魂の救いよりも自分のことを優先した。」その時の後悔は今も心に残っています。

近代から現代にかけての神学には伝統的な立場とは異なる聖書理解や実践も少なくありません。「それが本当に正しいのか」「それで本当にいいのか」そんな問いかけとともに、今年度の現代神学を担当させていただきました。在主感謝。（11月4日、召天。）

憧れと恐れ

青木 義紀
Yoshinori Aoki
聖書神学舎 講師

私の交友関係の中には、聖書神学舎を卒業した多くの友人・知人・先輩がいます。その誰をとっても信仰深く、みことばに誠実で、人としても魅力的な人たちです。私自身は、神学部の大学卒業後、22歳で伝道の現場に出て3年間働きに従事しましたが、さらなる学びの必要を覚えて休職し、神学校に入り直しました。その際、聖書神学舎で学ぶことも考えましたが、卒業生たちの偉大さに圧倒され、「自分に聖書神学舎での神学校生活は務まらないだろう」と敬遠し、早々に選択肢から外しました。

あれから21年。憧れと恐れの目で見つめてきた聖書神学舎の講師にと声を掛けていただき、誇らしい思いがしたのと同時に、封印していた恐れの心が再び頭をもたげてきました。神学生として務まらない者が講師として務まるわけがないと、断る理由を探す私の頭に浮かんできたのは、ギデオンとエレミヤの召命でした(士師記6：11-18、エレミヤ1：4-8)。いずれも主が遣わすと召された時、弱さや若さを理由に恐れました。しかし主が遣わし（士師記6：14）、主がともにいてくださること（エレミヤ1：8）を思う時、今できることをすればよいのだと思えるようになりました。小さき者を用いる主の御名をほめたたえます。

近況と祈りの課題

- □ 児玉剛先生は、予定されていた手術の直前、11月4日に急逝なさいました。ご家族と教会に主の顧みをお祈りください。
- □ 前期の働きが守られたことを主に感謝します。「学舎から」で言及されているような喜ばしい慌ただしさを経て、後期が始まっています。新講師の東海林隆之師がクラス担当を始めます。
- □ 卒業予定者4名のうち1名は、1月の出産予定を控えています。健康や学びの必要が万端満たされるようにお祈りください。
- □ 入学志願者が導かれるようにお祈りください。主の教会の働き人の必要を、主が顧み、満たしてくださいますように。
- □ 教職員のためにもお祈りくださってありがとうございます。教師の教鞭や研修生指導など、講師の奉仕、職員の健康と奉仕、教職員人事の今後など、祈りの課題は多岐にわたります。
- □ 財務のためにもご心配いただき、お祈りいただいてありがとうございます。厳しい状況は続いており、上半期末の実質的な不足額が約270万円となっています。